

～すてきなあなたへ～

今も輝くスター55 (2)

～オードリー・ヘップバーン～

人間としても女優としても永遠のプリンセス

デビュー作でいきなり世界を魅了

「目は口ほどにものをいう」とよくいうが、『ローマの休日』(53年)のオードリー・ヘップバーンとグレゴリー・ペックの無言の視線ほど切ないものはない。かなわぬ恋の痛さに胸を締めつけられたあのラストシーンを、私はまだはっきり覚えている。

ヨーロッパ某国の王女(オードリー・ヘップバーン)が、父王に代わって各国を親善訪問の旅の途中、ローマで好奇心から宿泊先をそっと抜けだし、ブラウスにスカートひとつで町に出る。ところが、その前に飲んでいた睡眠薬が効いてきて路傍で眠り込んでしまう。そこを通りかかったアメリカ人の新聞記者ジョー(グレゴリー・ペック)が、王女とも知らずアパートへ連れて帰って介抱する。翌朝、入社した彼は彼女の正体を知ってアパートに飛んで帰り、特ダネをモノにしようとの魂胆からローマ案内を買って出る。

やがて淡い恋が芽生えるが、お互いに素姓はあかさないうまに、しよせん、かなわぬ恋と諦め、切ない口づけを最後に別れる。2人が再び会うのは、各国のジャーナリストを集めた王女の記者会見の席。有名なあのラストシーンだ。昨日までとは打って変わって、豪華な正装に身を包んだ王女の気品と威厳に満ちた美しさ。このみごとな輝きがあるからこそ、ジョーと交わす無言の視線にこめられた愛の切なさが、身にしみたのだ。

アメリカ映画デビューのこの第1作でオードリーは世界のファンを魅了したうえ、アカデミー賞主演女優賞(第26回)を手にして、華麗な輝きで大スターへの道を歩き始める。富豪の屋敷のお抱え運転手の娘が、料理修業に行ったパリですばらしいファッションセンスを身につけ帰ってくる『麗しのサブリナ』(54年)、ニューヨークの古本屋の娘がプロも顔負けのファッションモデルに変わる『パリの恋人』(57年)、親子ほどの年齢差のプレイボーイに恋して美しい涙を見せる『昼下がりの情事』(57年)、大都会の泥沼の中で希望を見いだす『ティファニーで朝食を』(61年)、花売り娘が言語学者の特訓で優雅のきわみのレディーに成長する『マイ・フェア・レディ』(64年)——。オードリーがごく自然に身につけているあの気品とエレガンスは、両親から受け継いだものであろう。

第2次大戦後は貧しさに母と苦勞

オードリーは1929年5月4日、ベルギーの首都ブリュッセル生まれ。父はイギリス人で、当時イングランド銀行ブリュッセル支店の取締役。母はオランダ王室直系の貴族。6歳のとき両親が離婚したため、彼女はイギリスに帰った父に引き取られ、寄宿舎に入れられた。が、父はめったに訪ねてきてくれない。9歳でバレエを習い始めたが、ほどなく第2次大戦の勃発。ドイツ軍がイギリスに侵攻するのを恐れた母親は、法廷で親権をかちとり娘をオランダに引きとる。

ところが母親の予想と違って、ドイツ軍は母娘の住むオランダ、アンヘルムを占領。母は屋敷をもふくめた財産すべてを没収されてしまう。しかし気丈な母は、親独貴族を装う裏で、ひそかに同士たちとドイツ軍への抵抗運動を展開。子供たちもそれを手助けし、当時アンヘルムの音楽舞踏学院にかよっていたオードリーは、バレエシューズの底に抵抗組織からの伝言を隠し、ドイツ軍基地の間をくぐり抜けて、その向こうの森に降下したイギリスの落下傘部隊にメッセージを届けたこともあるという。

6年後に終戦。だが貧しい飢餓の生活は続く。そんな折りこの町を訪れたユニセフの前身であるアンラ（国連救済復興機関）の救援隊の人々がもたらした食糧や温かい看護の手のありがたさ。それが晩年のオードリーを、人類愛のために闘うユニセフ特別親善大使としての活躍へ導いていく。

1948年、バレリーナへの道を決意したオードリーは母とともに再びロンドンへ。母は貴族の身でありながら、花屋づとめや家政婦、アパートの管理人などをしながら娘を助け、ようやく小さな舞台のコーラスガールや映画の端役を得るようになる。やがてニューヨークのブロードウェイの「ジジ」に原作者コレット女史の指名で主役に大抜擢される。その評判が『ローマの休日』へとつながる。

懸命の努力で続ける結婚生活

素顔のオードリーは地道に堅実に、妻として母として人間として、変わる事のない生き方を、忍耐強く守り通そうとした女性であったと、私には思えるのだ。

それがよくあらわれているのが、メル・ファーラーとの14年におよぶ結婚生活とその破綻であろう。メルと知り合ったのは『ローマの休日』のプレミアでロンドンに行ったとき、グレゴリー・ペックが彼女のために開いてくれたパーティーでペックに紹介されたのがきっかけ。そのころのメルは、映画や舞台で演技するほか、演出も手がけ戯曲も童話も書く知性や感性の固まりのような人。23歳のオードリーはたちまち心を奪われた。12歳も年上だということも、父の愛から疎外されて育った彼女には、頼もしく抱擁力にあふれて見えたことだろう。

そのあと思いがけなくジャン・ジロドーの戯曲「オンディーヌ」のブロードウェイ公演に、

彼は皇子、彼女は水の妖精の役で共演。この中世の恋物語と同様、二人の心は完全にひとつになったのだろう、54年9月に結婚。彼女はこの演技でトニー賞さえ受賞した。ところが、彼女の人気を上り坂なのに比べ、彼のキャリアはすでに下り坂。その焦りからか、彼は何かにつけて夫として芸術家としての権威を振りかざす。一緒に仕事をした『戦争と平和』（56年）も『緑の館』（59年）も失敗作に終わりメルへの焦りは増幅していく。

それでもオードリーはメルとの結婚だけは何としてでも継続させようとした。子供ができれば家庭生活の亀裂は修復できるだろうと懸命に耐え、2度の流産を経て60年長男ショーンが誕生する。だがメルは、仕事らしい仕事もしていないのに、カトリーヌ・ドヌーブやスペイン女優のマリソルなどとの噂だけは絶えない。ついに絶望したオードリーは、彼がプロデュースした『暗くなるまで待って』（67年）を最後に、彼との別れを決意する。2人目の夫、イタリア人の精神科医アンドレア・ドッティとの結婚生活も、1児ルカ（70年生まれ）をもうけたが、夫の絶え間ない浮気に悩み、81年に破局を迎えている。

飢餓の子供たちに愛の手

思ってもみなかった2度の離婚の苦汁。その後はオランダ人俳優のロバート・ウォルターズと深く愛し合いながらも正式な結婚はさけ、母や息子たちもいるスイスの自宅で彼と静かに暮らし、平和を満喫していた。その安らぎの中で、やがてオードリーはもう1人の自分を発見する。遠く離れたどこかで、今日も飢餓に苦しんでいる子供たちへの思いに胸を痛める自分を。

これが彼女をユニセフの特別親善大使の仕事へと駆り立て、以後5年におよぶエチオピア、トルコ、バングラデシュ、ベトナム、ソマリアなどへの歴訪の旅が始まる。この功績によってオードリーは、民間人としては最高の栄誉「自由勲章」を与えられた。ソマリアから帰ったあとの92年11月、激しい腹痛で緊急入院したロサンゼルス病院で悪性腫瘍が発見され、手術の甲斐なく、結腸から胃に転移したガンは、翌年1月11日、彼女の命を無情にも奪ったのである。

オランダでの幼い日の体験を終生忘れることなく、わが子への愛を世界のすべての子供たちへの愛にまで昇華させたオードリー・ヘプバーン。私は彼女に、女優というよりも最も人間的な「愛の人」を感じるのである。

<菅沼正子>

映画評論家。静岡県生まれ。著書に「女と男の愛の風景」「スター55」「エンドマークのあとで」。1972年第45回アカデミー賞、1973年第46回アカデミー賞を記者席で取材。NHKラジオ深夜便で「菅沼正子の思い出のスクリーンメロディ」を2002年から2005年まで担当。地域のミニコミ誌「すてきなあなたへ」（佐倉市）の終刊2015年まで「菅沼正子の映画招待席」を執筆。